
コラム 8

同情された実施体制

緒方 JICA 理事長帰国後、宿題となったダルフルール訪問を行うためのアレンジを行っているときの話である。現地の治安状況から、UNICEF に車両や宿舎の手配をお願いすることとして、UNICEF のテッド所長と会議を持った。

話がひと通り終わり、テッド所長から、「今後は担当者同士で話し合しましょう」と切り出されたが、「その担当者は私自身です」と言うと、「一体何人で仕事をしているのですか？緒方理事長に直訴してあげましょうか？」と同情された。

スーダン全体をあわせると国際スタッフだけでも 100 人はいる UNICEF に対して、JICA は 3 人ですとも言えなかった。かくしてはじまったスーダンの事業も、2 年後には、3 人から 7 人になり、3 年後には 9 人と急増したが、これとて事業の増加にはまったく追いつかず、なかなか宿題は全部片付かなかった。

当初は、私自身がハルツームの銀行に現金を取りに行ったり、給与計算をしたり、伝票を入力する作業も担当した。事業拡張のため、ある程度自由にフィールドに出る時間が作れるようになったのは、阿部幸生次長が増員で赴任してきた 2009 年も半ばの頃であった。

以上